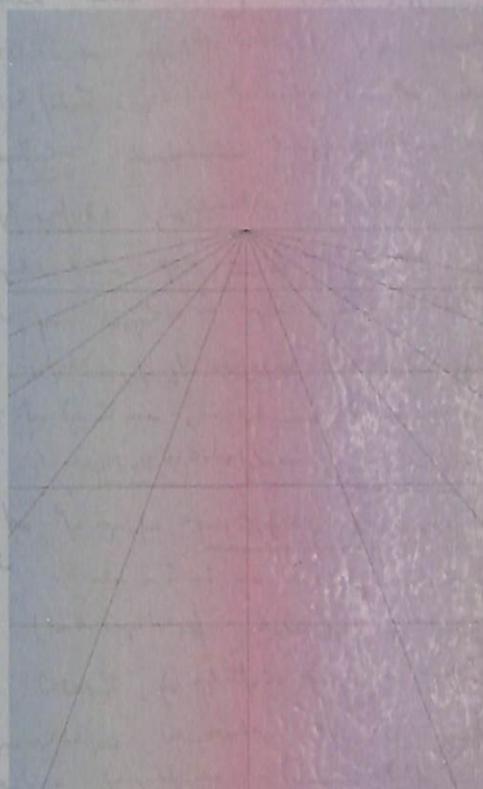


マルクスの アソシエーション論

大谷禎之介

著



未来社会は
資本主義のなかに見えている

桜井書店

であるにもかかわらず、その個性を練り上げ、発展させ、發揮することが不可能な状態におかれることになった。資本主義的私的所有の廢棄のうちに個人的所有が再建されることによって、はじめて労働する諸個人は、それぞれの個性を自由に全面的に發揮することができるようになる。しかも、たんに自然にたいしてのみならず、他の諸個人にたいして人間（人類）にたいする様態で関わり、そのことによってまた自分自身にたいしても人間にたいする様態で関わるようになるのである。

このようを見るなら、「個人的所有の再建」とは、たんに、生産手段ないし生産物がだれに属するか、という問題ではなくて、つまり商品生産のもとでの、つまりは資本主義的生産のもとでの経済的諸人格にとっての所有の問題とはまったく異なり、さきにすでに見た、人間的諸個人の個性的・類的發展のための前提の創出という意味をもつものなのである。この「個人的所有の再建」

この形態のもとですでに発生していた社会的所有の顕在化を実現する。この両者の関連は、逆に理解されてはならない。すなわち、いわゆる「生産手段の社会化」が「個人的所有の再建」を実現するのだ、と理解されてはならない。そうではなくて、自由な諸個人のアシシエーションが彼らの所有すなわち個人的所有を打ち立てる(herstellen)ことによって、はじめて生産手段の社会的所有が直接的なものとなるのである。

もちろん、すでに述べたように、「アソーシエイトした諸個人」が「アソシエーション」なのであり、それ自身が「社会」なのだから、「アソーシエイトした諸個人による所有」は同時に「社会」による所有である。そのような意味では「個人的所有」はまた「社会による所有」でもある。次の文章における「社会所有」は、そのように読まれなければならない。

「これは、最高に発展した」と

が生産者たちの所有に、といつても、もはや個々別々の生産者たちの私有としての所有ではなく、アシニシエイトした生産者としての彼らによる所有としての所有に、直接的な社会所有〔Gesellschaftseigenthum〕としての所有に再転化するための必然的な通過点である。」(『資本論』第3部第7章、MEGA II 4.2, S. 502; MEW 25, S. 453.)

ここではまずなによりも、株式会社における、機能と資本所有との完全な分離という「資本主義的生産が最高に発展してもたらしたこの結果」は、「資本が」すなわち生産手段が、「生産者たちの所有に再転化するための必然的な通過点」だと言われていることに注目しなければならない。すなわち、所有の主体が資本から生産者に転化する、ということである。そのうえで、その「生産者たちの所有」が、「個々別々の生産者たちの私有所有」、すなわち資本主義的私的所有が否定した「個人的所有」ではなくて、「アソシエイトした生産者としての彼らによる所有」であることが言われ、そしてまたそれが同時に「直接的な社会所有」であることが言られているのである。ここでの「社会所有」は、「アソシエイトした生産者としての生産者」そのものが「社会」であることを示しているのである。

1) この点については、「第2章「資本主義的生産の否定」はなぜ「個人的所有の再建」か」を参照されたい。